被災地で活動した赤十字ボランティア

令和6年能登半島地震では、延べ1709人の赤十字ボランティアが支援に携わりました（5月7日時点）。その活動内容は、救援物資の搬送や炊き出し、避難所を巡っての整体やマッサージ、リラクゼーションなど多岐にわたり、また、季節の変化とともに熱中症予防の啓発活動、仮設住宅のコミュニティ形成にもつながるグリーンカーテン作りなど、長期化する避難生活において、被災者の健康を維持し、目には見えないストレスをケアする取り組みも実施しています。平時から地域に根差した活動を続け、人々が本当に求める支援と向き合う赤十字ボランティアだからこそ可能な支援が行われています。

石川県内ボランティアの活動

七尾市矢田郷の避難所では、石川県赤十字安全法奉仕団・北陸大学学生赤十字奉仕団らによる**足湯・手浴・ハンドケア**が行われた。**〈写真左〉**安全法奉仕団によるハンドケアと足湯。幼児を連れたお母さんもひと時リラックス。**〈上の写真〉**石川県柔道整復師赤十字奉仕団は、発災から1カ月で延べ80人を超える奉仕団員が被災者をケア

県外から駆けつけたボランティア

神奈川県支部から派遣された医療救護班、8班すべてに救護・無線・山岳のいずれかから奉仕団員1人が帯同し、日赤の救護活動を裏方でサポートした。写真は避難所で段ボールベッドを組み立てる神奈川県山岳赤十字奉仕団の団員（右側）

志賀町では香川県レスキューサポートバイク赤十字奉仕団が地元のバイク仲間にも呼びかけて炊き出しを実施

珠洲市では、埼玉県赤十字救護ボランティアが日赤の救護活動に使用した大型テントの撤収作業に従事

献血ハートフルストーリー vol.8

このコーナーでは、血液事業に携わる日赤職員、ボランティアさん、献血協力者などの人たちが、日々どのような思いで血液事業に取り組んでいるのかを紹介していきます。

命を救うための、“つなぎ役”

今月のひと

profile
福岡県赤十字血液センター
学術情報・供給課
原田（はらだ） 滉（あきら）さん

私は病院で輸血する際に必要となる血液製剤の情報提供を担当しています。言ってみれば**血液センターと病院の「つなぎ役」**。具体的には、病院の持っている試薬では血液型を特定できないときに血液センターで血液を預かって調べたり、輸血を必要としている患者さんの「不規則抗体（赤血球に対する抗体のうちABO式血液型の抗A抗体、抗B抗体以外の抗体）」の有無を調べたりし、病院に検査結果を提供するなどしています。血液型が判明しないというのは、特殊な血液型や「稀血」という場合もありますが、投与されている薬の影響で判別が難しくなっているケースも多いです。また、**「不規則抗体」の検査は「溶血」などの副作用を防ぐために欠かせません**。当センターでは、福岡や北九州地区を併せて約500の医療施設に対応していて、月に2、3件ほど血液型の検査の依頼があります。その他、まさに今対応している案件が、他県からドクターヘリで福岡に運ばれてくる患者さんの、心臓移植手術。大量の輸血を必要とするので、病院に出向いて手術内容について聞き取りをします。このように、血液製剤がどのくらい必要か、治療や手術計画のお手伝いをすることもあります。

こんな専門的な業務を担当していますが、実は私は、医療とは無関係の大学出身。**学生時代に東日本大震災で救護活動をする日赤の姿に感銘を受けて入職**しました。最初の配属が福岡県内の赤十字病院、その後、現職に異動。正直、何年たっても学びと研鑽が続いています。最初は、血液製剤を必要とする人の多さと、安定した輸血を実現するための裏側の努力に驚きました。**災害の救護活動でなくても、命を救うことに関わっている、と実感する日々**です。

レクチャー中

輸血に慣れていない医療従事者向けに、血液製剤のレクチャーを担当することも